上高井教育会報

高甫小学校
創立150周年

高甫小学校 創立150周年
仁礼小学校
森上小学校 創立90周年

特集号

第241号
発行所
上高井教育会
発行人
上高井教育会理事長
梅本裕之
編集人
会報編集委員長
宮入勝彦
印刷所
須坂新聞社

高甫小学校は今年度、創立百五十周年を迎えました。本校は明治七年に「克譲学校」として野辺広正寺に開校しました。その後、昭和二十二年に六・三制の発足に伴い「高甫小学校」と改称され、高甫中学校も併設されました。昭和三十年には高甫村が須坂市と合併し、「須坂市立高甫小学校」となりました。

高甫小学校の校章には麦の穂に囲まれた柿の花があしらわれています。これらは高甫地区の特産物であり、特に柿は「八町柿」として有名です。「冬の麦ふみ」や「桃栗三年、柿八年」という言葉に象徴されるように、寒さ暑さに負けず強くたくましい人間に育ってほしいという願いが込められています。

昭和三十六年の春の遠足から明徳山の全校登山が始まり、現在も伝統行事として続いています。校歌の歌詞にもこの登山が歌われています。

百五十周年の節目の年の記念事業については、昨年度から実行委員会の皆様により計画・実施されました。

十一月一日には、午前中に百五十周年記念式典と記念講演会・コンサートを、午後には平和学習を含めた柿の皮むき体験会を行いました。

記念式典では、高甫小学校の百五十年のあゆみの映像の視聴や、現在全校や各学年で取り組んでいるふるさと「たかほ」学習（八町きゅうり、ヤマメ、ホタル等）についての各学年の代表児童による発表が行われました。厳かな雰囲気の中、盛大に式典を執り行うことができました。

続いて、世界的ピアニストである山本貴志さんの記念講演会・コンサート「平和と希望、未来へ」が行われました。山本さんはショパンコンクール第四位をはじめ数々の国内外のコンクールで入賞されている方です。山本さんが奏でるショパンのノクターンや幻想即興曲は会場中に響き渡り、多くの参加者の心が震える素晴らしい時間となりました。演奏の合間にはご自身がピアノを始めたきっかけや練習についてのお話があり、自分の経験をもとに仲良くすることや相手のことを考えることの大切さを教えていただきました。

山本さんの伴奏で「校歌」「ふるさと」等を会場の全員で歌い、一体感を味わうこともできました。最後には、感謝の気持ちを込めて高甫小学校からサプライズで「ビリーブ」（歌：児童、伴奏：職員バンド）を山本さんに贈りました。山本さんも大変喜ばれ、百五十周年を記念するとても感動的なコンサートの締めくくりとなりました。

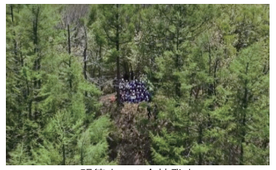
午後は、二〇〇一年に本校に植樹された長崎の被爆二世の柿（ナッキー・タッキー）について荒井清治さんにお話しいただきました。本校では毎年平和について考える学習を続けてきています。その後、地域作り推進委員会の方と共に柿の皮むき体験会を行いました。あゆかわグループ（縦割り班）に分かれて、高学年が低学年に教えながら、安全に柿の皮むきをすることができました。

また「歴史博物館」として、開校当時から現在までの貴重な記録写真や歴史遺産、周年行事写真を展示しました。多くの方々が昔を懐かしみながら興味深く見てくださり、感慨深いものがありました。この日は、大勢の来賓・保護者・卒業生・地域の方に参加していただき、一緒にお祝いできた思い出に残る一日となりました。

十一月九日には、PTA主催のイベント「スマイルフェスティバル二〇二四」が開催されました。全校児童・保護者・職員が作った折り鶴モビールが体育館に吊され、大変華やかでした。ボーカルアンサンブル部の合唱と消防団第八分団ラッパ吹奏の演奏で開会し、スタンプラリーでは学年毎に企画した催し物を親子で楽しみました。大盛況となり、みんな笑顔いっぱいで百五十周年をお祝いすることができました。

百五十年間にわたり本校を支えてくださった高甫の地域の皆様、在校生、保護者の皆様をはじめ、すべての方々に心より感謝申し上げます。これからも、「高甫の伝統と誇り」を大切にしながら、地域と共にある学校として、明日の日本をになう「人」の育成を共に進めていきたいと思います。

（須山　均）


明徳山への全校登山

山本貴志さんの伴奏に合わせての全員合唱

記念コンサート・記念講演会後の全員写真

折り鶴モビールで飾られたPTAイベント

教育会だより

7・13　第2回研究委員長会　中心講師のご指導・ご講演
講師　畔上一康　先生（長野短期大学・学長）
演題『人間的営みとしての学び』（各委員会の研究にかかわって）
研究企画委員会
第6回教研推進委員会
25　教育会夏期講演会　金藤理絵　先生
（リオデジャネイロオリンピック200m平泳ぎ金メダリスト）
演題『這い上がる力』
会員発表　発表者　元山雄三先生（須坂市立豊丘小学校）
演題『個別最適な学びに関わるフィールドワークを通して』
25～26　日本連合教育会研究大会愛媛大会
8・1～2　同好会夏期講座・第4回同好会（各会毎独自に開催）
19　上高井教育七団体代表者会（書面にて）
19　第7回教研推進委員会・第2回教研学校代表者会
公益目的支出計画実施報告書審査終了
26　第4回研究推進委員会　兼　信州教師塾B（於　豊洲小・体育）
27　信州教師塾B『仲間とともに学ぶ～畔上先生の講話を聞きながら～』
30　第5回同好会
9・4　第4回理事会
6　第8回教研推進委員会・分科会長会
7　上高井教育研究集会（分散会：須坂小・仁礼小・相森中・墨坂中）
16　上高井教育七団体代表者会　県教育委員会への要望書の集約
20　第5回研究推進委員会
10・1　第9回教研推進委員会
7　信州教師塾B『教育現場で使えるコーチング』研修
講師　内藤　睦夫　先生（「教と育」研究所　代表）
8　第6回同好会
10～20　第6回研究推進委員会
19　郡科学作品展
24　第7回研究推進委員会
26～27　あゆみ展・郡市展覧会（シルキーホール）
29　第5回理事会・令和6年度教育会中間会計監査
11・1　第7回同好会
6　上高井教育会公開授業研究会　体育・保健体育（豊洲小・中心講師ご指導）
国語（墨坂中）、社会（東中）、算数・数学（小布施中）、理科（相森中）
生活・総合的な学習（井上小）、音楽（日滝小）、図工・美術（高甫小）
家庭・技術家庭（高山中）、外国語活動・英語（小山小）
道徳（高山中）、特別支援教育（高山小）、健康教育（教育会館）
11　第2回教研三団体代表者会
14　第4回教育会総会
16　○令和6年度教育会中間会計監査報告　○令和7年度教育会事業計画案
22　信州“教育の日”山ノ内大会
26　第8回同好会
12・16　第8回研究推進委員会
20　第3回研究委員長会
上高井教育会報第241号発行

火ばち談義

輪（和）を生む野菜作り

山田千秋

「きゅうりの辛子漬け、どうやって作っていますか」。帰宅際の職員室に聞こえてくる夕暮れの会話。出勤前の畑で採れたきゅうりをお譲りすると、つい会話が弾み、晩ご飯の話題になる日があります。そんなひと時が一日の終わりを迎え、ほっとする時間かもしれません。

私が家庭菜園を始めたきっかけは、数年前のコロナでした。生徒が半日で下校になり、部活動ができない日々。私の帰宅時間も早まり明るいうちに帰宅すると、草だらけの畑がありました。

私自身が、まだ子育てに夢中になっている時、先輩の先生方が、「早く帰って白菜の種を蒔かないとね」と、話していました。まさか、今の私も同じ日々を迎えるとは想像もつきませんでした。

実家が農家でもなく、畑仕事については全くの素人。しかし、月に一度会う姑が少し野菜作りをしており、時々届けてくれていたので旬の野菜くらいは知っていました。今なら、姑に野菜作りを習い、お茶飲み話の一つになると思ったことが始めたきっかけでした。時々会う姑とは、勿論、畑の話題に花が咲きます。同じ市内ですが北と南に住む者として、「こちらは、芽が出たよ」「もう、収穫できそうよ」等と情報交換しながら少しずつ野菜作りを学んでいます。今では、お互いに採れた野菜を交換したり食べ比べしたりしながら楽しんでいます。まだまだ元気な姑です。今のうちに、もっと話を聞いて、アドバイスをもらいながら色々な野菜に挑戦していきたいと思っています。

また、生徒と地域で採れた野菜や果物の話をよくします。生徒の日記には、「先日、植えたラディッシュが大きく実り美味しく食べました」と書かれていたり、学級通信の季節の話題に載せてみたりしています。草取りをしながら、自分で育てた野菜を味わい感謝して頂くように、自ら経験して喜びや苦労を生徒と共感出来ることをとても幸せに感じます。

働きながら畑仕事をすることは、私にとって簡単なことではありませんが、周りの雰囲気を和ませてくれる野菜作り。これからも、できる限り続け、先生方や家族、そして私自身が明るく元気に過ごせることを大切にしたいと思います。

（常盤中）

豊丘小のマスコットキャラ「りゅうぼん」

旅する私

村上茉椰

地図を広げ、指を滑らせながら、旅の計画を立てている。私には密かな夢がある。それは日本全国を旅行するという夢だ。

旅行が好きになったきっかけは、大学生の時、長野を離れ、青森へと進学した時である。長野と青森は日本列島の南北に長く離れているのにも関わらず、冷涼な気候や山に囲まれたリンゴ園が広がる風景、そば屋が連なる町並みなど、故郷と共通する部分が多くあり、離れていてもどこか懐かしい気持ちになった。また、ねぶた祭りや三内丸山遺跡、太平洋の景色など、青森でしか見られない風景や、独自の文化にも多く触れた四年間であった。最初は、慣れない環境で不安や孤独を感じていたが、四年間の生活の中で初めての自然や文化、人に出会うたびに、もっと日本で新たな発見や感動に出会いたい、日本をもっと知りたいと思うようになった。

先日、長野から草津温泉へと小旅行に出かけた。初心者ドライバーながら、二時間かけて志賀草津高原ルートを走り、窓から見える雄大な山々や軽自動車では上るのが精一杯な山道は、長野が山岳地帯である事を実感させられた。草津白根山では、ツーンとした硫黄の匂い、立ちこめる白い煙、乳白色に染まる地面、黒い火山岩、その景色はまるで、異世界に飛び込んだようであった。

草津温泉での景色を友と楽しんでいると、ふとした疑問がよぎった。「どうして温泉街には、こんなにも坂道や川が多いのだろう？」。確かに、今まで旅行した温泉街を思い浮かべると、急な坂道や近くには川や滝が流れていた。新たな地形の共通点と疑問の発見に胸が高鳴った。友と様々な予想を立てながら、次に温泉街に旅行する時は、ヒールを履くのはやめようと靴擦れした足で次の旅行に思いを巡らせていた。

私にとって旅行は、人生を豊かにする大切な要素だ。美しい風景、未知なる世界への探求、思い出に残る瞬間。これらの経験は、私を成長させ、未来への希望を与えてくれる。これからも様々な場所に足を運び、新たな発見と出会い、日本全国の旅行の夢をのんびりと叶えていきたい。

（東中）

編集後記

令和六年度会報二四一号を無事に発行し、お届けすることができました。今号は、昨年度の会報二三九号に引き続き、創立から百五十周年を迎えた高甫小と仁礼小、また九十周年を迎えた森上小より寄稿いただきました。

このような記念の節目を迎えられることは、決して当たり前のことではなく、これまで携わってこられた全ての教職員、地域の皆様、そして児童生徒たちの協力があってこその成果であると心より感じ入っております。

ご多用中にもかかわらず、執筆にご協力いただいた会員の皆様に、心より感謝申し上げます。今後も皆様からのご意見やご感想を参考に、より親しみやすい会報づくりに励んでまいります。

（藤澤）

仁礼小学校 創立150周年

本校は、明治六年に村内有志が中村地区の高顕寺、亀倉地区の萬龍寺を借りて私塾を開設したことに始まります。翌年、それぞれ公立学校として仁礼（じんれい）学校、成器（せいき）学校となり、明治十九年には両校が合併し、仁礼尋常小学校となりました。その後、仁礼尋常高等小学校、仁礼国民学校と変遷し、昭和二十二年、仁礼小学校となりました。

昭和二十九年には仁礼村と豊丘村が合併して東村となり、校名も東村立南部小学校となりました。卒業生である山岸右京氏より、プレイエル社製のピアノをはじめ多くのものを寄贈いただき、教育環境の整備に尽くしていただいたのがこの時代です。このピアノは、現在東中にあります。

南部小時代に開校九十周年を迎え、記念事業の一つとして校歌が制定されました。歌詞には学校近くの湧水「生守（いけもり）」や「妙徳の山」、「仙仁川（せにがわ）」など、地元の地名が出てきます。仁礼地区を愛する思いが溢れる素敵な校歌だと思います。

その後、昭和四十六年に須坂市へ合併し、須坂市立仁礼小学校となりました。本年度百五十周年を迎えた本校の記念事業を紹介します。

①百五十周年記念運動会

五月二十六日、さまざまな場面に「百五十周年」をちりばめながら実施しました。特に、五・六年生の表現種目では、百五十周年を祝う場面が最後にあり、会場が感動に包まれました。また、令和二年の第百回運動会に誕生したキャラクター「ニレッチー」が登場し、校歌ダンス「ニレッチーダンス」を踊りました。

ニレッチー

②記念航空写真撮影

六月十二日に実施しました。人文字をつくってドローンで撮影し、高所から全校集合写真を、さらに昇降口前で学級の集合写真を撮影しました。

③百五十周年記念音楽会

子どもたちの真剣な演奏はもちろん、今年は、PTAコーラスがありました。昨年一区切りとなりましたが、「百五十周年の記念として、今年はPTAコーラスをやろう」というPTA会長様の熱い思いを受け、いきものがかりの「YELL」を歌いました。家庭数は百二十三なのですが、六十名近くも参加者がいたこと、音楽会終了後には会場をすんで片付けていただいたことなど、PTA活動の力強さを実感しました。

④百五十周年記念誌作成

「その時に在籍した子どもたちが後で手に取ることが多くなるものにしよう」という方針で作成しました。子どもたちを大切にする仁礼地域の皆様の考えがここにも表れています。

⑤百五十周年記念花火

「子どもたちの思い出に残ることをしよう」というPTA会長様をはじめ会員の皆様の熱い思いをきっかけに実現しました。実行委員が許可申請や近隣へのご挨拶など準備を着実に進め、当日は消防団の皆様の全面協力のもと、安全対策を整えて実施できました。

花火が上がる前には、本校保護者でもあるフリーレポーターの小林知美さんに司会をお願いし、花火打ち上げに向けて盛り上げていただきました。子どもたちは五・六年のダンス、そして全校児童のニレッチーダンスを披露しました。さらに、六年生企画による百五十周年クイズで楽しみました。そしていよいよ花火の打ち上げです。目の前で上がる花火に、子どもも大人も大興奮でした。

翌日には「仁礼一帯（1）ごみ（5）ゼロ（0）運動」と銘打って親子でごみ拾いもしました。仁礼地域を愛する思いが、百五十年の歴史の中に受け継がれていることを実感しました。

これらすべてのことから、仁礼の皆さんが、子どもを本当に大切に考えてくださっていることを感じます。地域に大切にされている仁礼小学校。これからも、地域とともに歩んでいきたいと思います。（池内　博）

親子でごみ拾い

150周年記念花火

森上小学校 創立90周年

森上小学校は本年度、創立九十周年を迎えました。九十歳となった森上小学校が、次の百年に向かって、進んでいくことができるよう、学校長から児童へ、次の話がありました。

今年は、森上小がスタートして、ちょうど九十年目の年にあたります。九十周年を祝って、五月には九十周年記念運動会を行いました。十月には、空から森上小のお祝いの写真を撮る記念航空写真、九十周年記念音楽会などを予定しています。全校の皆さんには、空からのお祝い写真のデザインを考えてもらいましたね。今日は、森上小九十年の歴史その一として「学校の様子と変化」についてお話ししたいと思います。

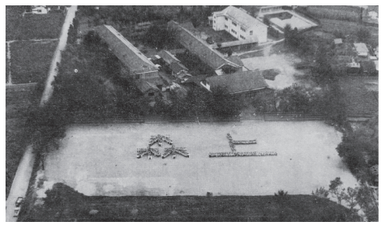
90周年記念種目「大玉送り」
保護者、地域の皆さんと共に

今から九十年前の一九三四年（昭和九年）に須坂尋常小学校森上部が開校され、森上小学校の歴史が始まりました。森上という名前は、墨坂神社の森の上に位置する学校で、神社の大木のように子どもたちがたくましく育つようにとの願いが込められて決められました。校舎は、校歌でも歌われているように、緑の壁に赤い屋根でした。

グランドの位置は同じですが、校舎は斜めに三つありました。体育館も今と違う場所です。正門には、学校目標「明るく直き心」が刻まれています。今も児童玄関前のロータリーにこの石が置かれていますね。

全校で二三六名の森上小ですが、九十年前は全校で、五六〇人でした。

一年生から四年生は、須坂尋常小学校森上部（今の森上小）に通いました。各学年には智・仁・勇が三学級ずつあり、全校で十二学級でした。五・六年生は、本校の須坂尋常小学校（今の須坂小学校）に通いました。当時は一クラス四〇人～五〇人でした。


須坂尋常小学校森上部

九十年前の二年仁組の子どもたちです。髪型や服装など、今と全然違いますね。卒業式の日の六年生は、みんなとってもいい笑顔です。職員室の様子からは、給食はなく、お弁当を持参してお昼を食べていることが分かります。

一九四七年（昭和二十二年）、一年生から六年生までが通う須坂町立森上小学校と名前を改めました。

今から七十年前の一九五四年（昭和二十九年）、開校二十周年記念式典が行われました。この年にはプールが完成し、校歌が作られました。

この頃の運動会は裸足で行っていました。白いシャツに白い半ズボン、ハチマキでした。高学年の女子はダンス・表現を行い、男子は組体操を行いました。

今から四十年前の一九八四年（昭和五十九年）、創立五十周年を記念して、新校舎が完成しました。緑の壁と赤い屋根の古い校舎が壊され、今、皆さんが生活している新校舎になりました。今の校舎は今年四十歳です。

毎朝、皆さんと挨拶を交わしている校門前は、まだ桜の木も植えられていませんね。お祝いの式典は、この体育館で行われ、グランドピアノのお披露目もありました。中庭は今の様に畑ではなく花壇でした。全校が中庭に集まって花壇についての説明を聞く児童集会もありました。

森上小は今年九十年、次の百年に向かって突き進んでいきます。この先十年、どんな森上小にしていきたいですか。未来の森上小について、皆さんの考えが聞けると嬉しいです。

過去の森上小に触れた子どもたちは驚きの連続でした。そして子どもたちからは、様々なつぶやきが聞こえてきました。

学校長の問いかけ「どんな森上小にしていきたいですか」を聞いたとき、一人ひとりの目がきらきら輝いているように見えました。心にどんな学校、自分を想像したのでしょうか。いつの時代もきらきら輝いていた森上の子どもたち。この先もきっと、きらきらと輝き続けてくれると信じています。（山本　論）

中庭での児童集会

本校の宝 83　小山小学校

♪仰ぎ見る日本アルプス　光あり　ここに学ぶよ♪

本校に赴任し、始業式で初めて聴いた校歌。新学期を迎えて、新しい出来事や出会いへの希望が感じられる、キラキラした眼差しとすてきな歌声に、私も頑張ろうと強く思った瞬間でした。

本校の校歌は、児童文学者・国語教育学者の石森延男作詞、「たなばたさま」や「かくれんぼ」を作った下総皖一作曲です。創立八十周年を記念し昭和二十八年に作られました。

一～三番の歌い出しは、小山小から見える北アルプスや臥竜山など、子どもたちの身近な自然。それぞれの終わりは、子どもたちを導き、励ましてくれるような歌詞です。

校歌が大好きな子どもたち。どのクラスにも、歌いたい曲に「校歌」を挙げる子がいます。好きなところを聞くと、「歌詞がいい」「リズムがいい」「歌いやすくて綺麗な感じ」「わかりやすく、みんなが楽しく歌える曲」など。中でも、「三番の『友よいざ力を合わせ共に進まん』が友だちと力を合わせている感じがあって、すごくいい」という声が多数。

また、「昔から今も、ずっとみんなで歌っているところがいい」という人も。四年前の自動演奏ピアノのお披露目会では、ピアノを寄贈してくださった卒業生と校歌を歌いました。年代を問わず共に歌える校歌は、やっぱりいいなと実感する心温まる時間でした。

昨年、創立百五十周年を記念してリメイクされた校歌ダンスも人気です。音楽室では、自然と踊りながら歌う子が続出しました。

いつまでも大事に歌いつないでいけるように、一緒に歌っていきたいと思います。（小林理恵）

QRコードで校歌が聞けます

本校の中核活動　縦割り班活動　須坂小学校

須坂小学校は、「自ら学び続け、共生社会を主体的に生きる児童の育成」を学校教育目標に掲げています。その学校目標具現化の中心的な活動の一つとして、異学年縦割り活動に力を入れ取り組んでいます。全校児童を縦割り十八班に分け、お昼の十五分間や朝の集会等を使って交流を積み重ねています。

学校のグランドデザインには、目指す子どもの姿として「自分から・つながる・認め合う」というキーワードのもと、異学年縦割り活動を通して、「自分の役割に気づき、果たす」「友だちの良さや違いに気づき大切にする」「様々な考えを受け入れ、共に成長する」を掲げています。目標の具現化が子どもたちの今と将来の幸せにつながっていくと、考えています。

ここからは、リーダーである六年生の様子を中心に活動の様子を紹介します。一回目の活動は自己紹介です。班ごとに集まり円をつくり、一人ずつ名前と好きなものを話します。大人からすれば「これだけ」のことでも、子どもたちにとっては一苦労でした。どうやって説明しようか、順番はどうするか、時間が余ったらどうしようか…。頭の中に「どうしよう」が沢山出てきていました。同じ学年の友だちであればなんともないことが、違う年齢、関わりが少ない人になった途端、一気に難しさが出てきます。大人の中で自然と行っている異年齢での関わりは、子どもにとっては学ぶ要素が多くある特別な経験であると改めて気づきました。

二回目は、折り紙で七夕飾りを作りました。低学年にもわかるようにと事前に見本を作っておく班、手順をタブレット端末ですぐに表示できるよう準備する班などが出てきました。一方で、「話を聞いてくれない」「ふざけていて困る」など、新たな課題も出てきました。そんな中、校長講話で縦割り活動について全校で考える機会がありました。校長先生の「みんなが楽しめることを考えよう」という一言には、「どの立場の人にも得意不得意があって、そのことを理解し、その人のことを想像していくことが、みんなが楽しめる空間に繋がっていく」という意味合いが込められています。「相手が○○してくれない」という前に、「その人の苦手を理解してあげられていたか、自分もそこを考慮して進めていただろうか」と気づくきっかけになりました。

三回目は、班ごとに活動を決めて遊ぶというものでした。クイズ大会、手押し相撲、縄くぐりゲームなどを行いました。手押し相撲では、高学年は片手でやる、縄くぐりゲームでは高学年が低学年のサポートに回るなど、学年の力に応じたルールを作り、「みんなが楽しめる」工夫が多く入ってきました。

四回目から支援学校の全校児童生徒も加わり、ダンスをしたり班の写真を撮ったりしました。そこでは、大きな音が苦手でイヤーマフをつけた友だちがいたので、「ダンスの音が大きいと困るから小さくしよう」と調整する六年生の姿や、写真を撮る際、その場から動けない子がいると、その子の周りに他の子どもが集まるという姿が見られました。他にも、朝の集会で班ごと集合する場面で、事前に迷子になりやすい一年生を把握し体育館入り口で声を掛ける姿も出てきました。「その人のことを理解して、自分の動きを考えて動く」活動を繰り返すうちに、子どもたちの考えや行動に変化が見られてきました。

今年度は、活動の一歩目。試行錯誤しながらも、私たちの目指す目標に確実に近づいています。この一歩目から、今後の子どもたちの探究的な活動として、さらに面白さを生み、発展していく活動にしていきたいと思っています。（小山早恵）